

## E. ボット『都市家族——夫婦役割と社会的ネットワーク』（1955年）

——ねばり強い事例分析がもたらした発想の転換——

野 沢 慎 司（明治学院大学社会学部社会学科教授）

近年注目を集める社会的ネットワークや家族の研究において、今なお繰り返し引用されるエリザベス・ボットの古典的名著、*Family and Social Network*（1957）は、彼女がロンドン大学に提出した博士論文を出版したものである。標記の論文は、その中核部分を成すⅢ章とⅣ章の原型であり、書籍出版の2年前に *Human Relations* 誌に掲載された。この論文を読むだけで、革新的な研究の核心は十分に味える（拙訳は野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論』勁草書房、2006に所収）。その革新性とは次の2点である。

第1に、家族研究の世界においてまったく独立に進行していた夫婦関係研究と世帯外の親族関係（および近隣関係など非親族関係）研究とを結びつける新しい視点を提示した。それまでは（そして今もなお）、現代家族というものは、他の社会関係から隔絶した小集団であると暗黙のうちに見なされてきた。しかしボットは、夫婦関係が孤立した世帯内で形成されるのではなく、それをとりまく親族関係や友人関係のネットワークから直接の影響を受け、変化することを発見したのである。その方法は、20家族の自宅を夕刻に訪問し、平均13回（8～19回）の夫婦合同の半構造化インタビューを実施し、最低1回は週末の昼間に子どもを含む家族全員の様子を観察する、という入念なものであった。夫婦役割関係の多様性をいかに説明するか——膨大な質的データとの格闘の末にボットがたどり着いたアイデアは、説明変数としての世帯外ネットワークであった。

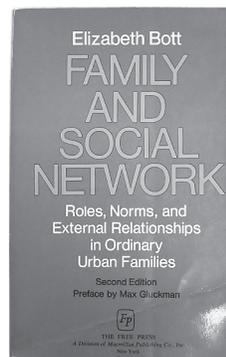
第2に、「社会的ネットワーク」という概念を比喩的ではなく分析道具として駆使し、ネットワーク分析の新たな地平を開いた。後にネットワーク分析の鍵概念となる「ネットワーク密度」（ボットの用語法では「ネットワーク結合度」）を使った先駆的な分析は、いかなる構造のネットワー

クが「規範への同調」や「規範への社会的圧力」を強めるのかを考察するモデルとなった。これは汎用性の高い理論的・方法論的ブレイクスルーである。事実、M. グラノヴェッターの「弱い紐帯の強さ」、B. ウェルマンの「コミュニティ解放論」、R. パートの「構造的隙間」など多様な後続ネットワーク論の知的源泉となった。

ただし、ボットの提示した具体的な仮説自体は、多数の後続研究によって様々に批判され、通文化的な妥当性をもたないことが明らかになった。しかし、ボットの着想自体が否定されたというよりも、時代や（地域）社会が異なればネットワークの構造もそこに生じる規範の内容も異なること、したがって夫婦関係への影響も一定ではないことなど、新たな興味深い知見を誘発したと言うべきだろう。

ちなみに、グブリアムとホルスタインはその著書『家族とは何か』の中で、「世帯の中にこそ家族の真正な姿がある」という前提に立った従来の家族研究方法論の代表例としてボットのこの研究を取り上げ、構築主義の立場から批判している。現在から見れば、確かに彼女の調査設計にはその

ような限界がある。にもかかわらず、おそらく周辺情報として収集した世帯外の交際や活動についてのデータを虚心坦懐に精査して、当時の学界の常識では見落とされがちな世帯の内と外の影響関係メカニズムを発見した。その貢献にまったく触れずに批判だけするのは不当ではないか、と反論したくなるのを禁じえない。



1970年に出版された  
*Family and Social Network* 第2版

## NFRJ (全国家族調査)：現代日本の家族の実態をあきらかにする

嶋 崎 尚 子 (早稲田大学文学学術院教授)

「全国家族調査」(National Family Research of Japan, 以下NFRJ)は、1998年から実施されている全国確率標本による家族調査である。概要を紹介しよう。第一に、NFRJは日本家族社会学会を母体を実施されている。90年代初頭から学会有志を中心に、日本家族の将来像や戦後の変遷について、信頼できる共通のデータを用いて議論することの必要性が高まり、NFRJにむけた運動が始まった。95年には、学会内に全国家族調査委員会を組織し、全国調査を定期的実施する体制づくりに着手した。そして98年に「第1回全国家族調査(NFRJ 98)」(98年12月標本抽出、99年1月実査)が実施された。その後5年間隔でNFRJ 03、NFRJ 08を実施し、今後は10年間隔で実施する予定である。また、2001年には女性を対象に、特別調査「戦後日本の家族の歩み調査(NFRJS 01)」も実施した。

第二に、NFRJの調査デザインはユニークである。世帯ではなく個人を単位として家族を観察している。28-77歳男女(NFRJ 08では72歳)を対象に、各人が保有する特定の親族的位置(配偶者、父、母、子、きょうだい、義父、義母など)の相手ごとに、同一質問項目を用いてその関係を測定している。

第三に、NFRJの運動は、1990年代の公共利用データによる二次分析への関心の高まりとも呼応している。計画段階からデータ公開の意義を重視し、それを企図してきた。具体的には、実査後に学会内での共同利用を開始し、報告書の刊行を経て、専門アーカイブへ寄託し、公共利用に供するという手順をとっている。すでに、NFRJ 98、NFRJ 03、NFRJS 01をSSJDAを介して公開し、海外を含む多くの研究者に提供している。家族に関するライフコースの趨勢と家族ネットワークに焦点をあてた分析の可能性を高め、家族領域での計量研究の蓄積に貢献している(写真は優秀論文へのデータ提供に対するSSJDAからの感謝状を囲



んだメンバー)。その成果として『現代家族の構造と変容』(2004、東京大学出版会)と『現代日本人の家族』(2009、有斐閣)などがある。

第四に、NFRJ 08ではパネルデザインを導入した。個人水準の持続と変化を把握するためには、パネルデータの構築が不可欠であり、当初からの課題であった。米国のNational Survey of Families and Households(NSFH)等を参照に検討をかさね、ようやくNFRJ 08で着手することとなった。当面、短期間のパネルデータを構築する予定である。

以上のように、NFRJはいまだ発達途上にある。他の調査と同じく、調査協力や資金調達などで社会調査の困難に直面しているばかりでなく、発達途上ゆえの課題も多く抱えている。たとえば、年齢とライフステージとの対応の問題がある。親族的位置とその関係性はライフステージごとに異なるが、年齢の分散が大きい。NFRJ 08では、NFRJ 03までのライフイベント経験年齢の分散をもとに調査票を3種(若年、壮年、高年)にわたる試みをしているが、問題解決にはいたっていない。また、個人単位での観察と同時に、世帯情報も不可欠である。世帯の把握にこれまでの3調査でも異なる形式を試みたが、継続課題である。最後に、本プロジェクトの発達にむけ、NFRJを多くの研究者に利用していただき、データ・方法とも精緻化がはかられることを切に願っている。